

悠久の風がまじわるふるさと 2050

久之浜・大久地区 復興グランドデザイン



平成 26 年 7 月

久之浜・大久地区復興対策協議会
い わ き 市



はじめに

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災は、我が国の観測史上例を見ない規模の大地震で、東日本各地に甚大な被害を与え、ここ久之浜・大久地区においても、津波や火災により、多数の死者や行方不明者を出すなど、壊滅的な被害に見舞われました。さらに、これらの甚大な被害に加え、東京電力福島第一原子力発電所の度重なる重大な事故やトラブルにより、地域住民の市外への避難という非常事態となっただけでなく、放射性物質の拡散による農作物の摂取制限や出荷停止、漁業の操業停止など、生活基盤を脅かすさまざまな問題が発生いたしました。

このような中、久之浜・大久地区復興対策協議会は、被災者の支援や復興対策など、地域住民の安全・安心の確保を目的に平成 23 年 4 月に設置し、山積する数々の課題にこれまで取り組んで参りました。

そして、震災から 2 年半が経過し、久之浜・大久地区の復旧・復興の歩みを着実に進めていくため、このたび、今後の久之浜・大久地区の目指すべき方向性を示す、道しるべとなる、「久之浜・大久地区復興グランドデザイン」を、昨年 10 月の発足時から月 2 回開催のハードスケジュールの中で、遠藤諭部会長を初めとした各地域の若手のリーダーや公募で参画いただいた委員の皆様により、行政との協働のもとに策定いただきました。

委員の皆様には、仕事や家庭を持つ傍ら、貴重な時間の合間を縫って、数多くの議論を重ねながら、さまざまな知恵やアイデアをこのグランドデザインに結集していただきましたことに感謝申し上げますとともに、委員の皆様の御労苦に深く敬意を表する次第です。

現在、久之浜・大久地区では、土地区画整理事業が施工され、海岸沿いには防災緑地が整備されるなど、まちの復興に係るいくつかの事業が一斉に動き出している状況であります。地域の皆様が、一日も早く平穏な暮らしと安寧を取り戻し、ふるさとが再び力強く輝いて復興するためにも、私たち復興対策協議会は、地域住民の皆様の御意見や御要望に答えられるよう、いわき市など各関係機関と連携を図りながら、誠心誠意対応して参る所存でございますので、地域住民並びに関係各位の皆様には、さらなる御理解と御協力をお願い申し上げます。

平成 26 年 7 月

久之浜・大久地区復興対策協議会
会 長 吉 原 二 六

目 次

はじめに

1. 復興グランドデザインの意義と前提条件	1
(1) 復興グランドデザインの意義	1
(2) 前提条件	2
2. 地区の現状と課題	3
(1) 地区の現状	3
(2) 地区の課題	5
3. まちづくりの目標とテーマ	9
(1) まちづくりの目標	9
(2) まちづくりの基本理念	10
(3) まちづくりのテーマ	11
4. まちづくり方策	12
(1) 被災地区の再生	13
(2) 安全・安心の向上	15
(3) 定住環境づくり	18
(4) なりわいの確立	23
(5) 自然との共生	28
(6) 文化と個性の継承・創造	29
(7) 人づくり・交流・情報発信	31
5. まちづくり方策の推進に向けて	34
(1) モデルプロジェクト	34
(2) まちづくり方策の推進体制	35
6. 参考資料	37
○ 久之浜・大久地区復興グランドデザイン策定部会開催の経緯	37
○ 久之浜・大久地区復興グランドデザイン策定部会名簿	37

表紙写真 : 波立海岸の初日の出 (H25 年 1 月)

裏表紙写真 : ハマエンドウ (H24 年 5 月)

(1) 復興グランドデザインの意義

平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災とそれに伴う福島第一原子力発電所事故により、久之浜・大久地区は甚大な被害を受け、地区住民の生活や産業の基盤が大きく損なわれました。地区の再生を図るために、地区が一丸となって、市民と行政が役割を分担しつつ復興への努力を続けていかなければなりません。

この復興グランドデザインは、久之浜・大久地区の復興・将来に向けた新しいまちづくりの目標と進めるべき施策・方策を明らかにし、共有することを目的として策定したものです。

この復興グランドデザインは、21 世紀半ばを展望し、市民と行政の協働で進むべき共通の道筋を体系化して示し、地区外に避難している住民も地区に戻り、さらに新たな住民も呼んで活力を取り戻すためのよりどころとするものです。

従って、この復興グランドデザインは、行政による本地区に関わる施策の指針となると同時に、地区住民の主体的な復興・まちづくり活動の指針として活用していくものとなります。

この復興グランドデザインは、久之浜・大久地区復興対策協議会と、いわき市・福島県による横断的プロジェクトチーム体制の協働作業により、策定したものです。久之浜・大久地区復興対策協議会では、「復興グランドデザイン策定部会」を設置し、これを中心に議論を重ね、行政との調整等を経て内容の作成を行ってきました。



津波に耐えた稲荷神社 (H26 年 4 月)



花供養 (H26 年 3 月)



久之浜クリスマスイベント (H23 年 12 月)

（２）前提条件

- ・ 久之浜・大久地区内でも被災状況はそれぞれに異なりますが、海から山に至る地区全域をこの復興グランドデザインの対象区域とします。
- ・ この復興グランドデザインの目標とする時期は、西暦 2050 年ごろとしますが、すでに進行中のものも含め、短期的な事業や、長期・継続的な取り組みなどを総合的に盛り込むものとします。
- ・ 久之浜・大久地区では、これまで、平成 15 年 3 月に久之浜・大久地域づくり協議会が「久之浜・大久地域づくり全体構想」を策定するなど、まちづくりのビジョン等を描いてきた経緯がありますが、この復興グランドデザインは、震災による環境変化も踏まえ、それらを発展的に包含したものとします。
- ・ 沿岸部の津波被災地区では、土地区画整理事業、防災緑地の整備、防災集団移転促進事業等の、復興関連基盤整備事業が進行しており、これらにより安全性の高い市街地の基礎が再生することを前提とします。
- ・ 福島第一原子力発電所による放射能災害に対しては、廃炉に向けたロードマップのもとで作業が進められるとともに、除染活動が計画的に進められることを前提とします。
- ・ このほか、震災・原発事故の有無にかかわらず、全国的な人口減少、少子高齢化の進展、情報化などの大きな潮流があり、これらを踏まえたものとして策定します。
- ・ この復興グランドデザインに盛り込まれるまちづくり方策には、行政による施策と、地区住民や民間事業者等による主体的活動、及びその両者の協働による取り組みが含まれます。



津波被災後の久之浜市街地で描かれた
ガレ花アート（H23 年 7 月）



海岸堤防の整備工事（H26 年 3 月）



久之浜・大久地区復興祭（H25 年 10 月）

(1) 地区の現状

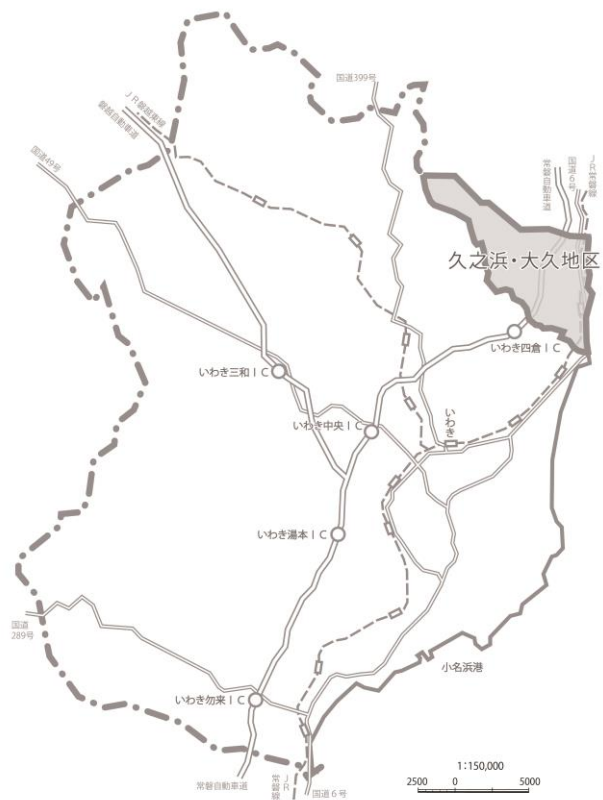
●位置と自然

久之浜・大久地区は、広域都市であるいわき市の北東端にあつて太平洋に面し、双葉郡広野町と接する位置にあります。

海岸線は、海水浴場にもなる砂浜を挟んで、波立海岸・弁天島、殿上山などが景観美を見せており、入江をなす久之浜港は天然の良港として避難港の役割も担ってきました。波立や金ヶ沢の海岸にはハマギク、ツワブキも自生します。

西部には三森山に代表される豊かな森林地帯が広がり、そこから流下する大久川等の河川は三森溪谷等の自然景観を形成し、淡水魚も豊富です。地区内各所に各種の保存樹木も有します。

地区内には中生代白亜紀の地層があり、巨大アンモナイトやフタバスズキリュウと命名された海竜等の化石を産するとともに、日本三大琥珀産地のひとつでもあります。また、入間沢温泉、久之浜鉱泉、谷地温泉という温泉・鉱泉資源も存します。



●歴史文化

地区内には、亀ヶ崎遺跡、連郷遺跡など、古代人の生活の事跡が見られるほか、波立薬師など多数の寺社や西行法師の碑などが人々の生活や交流の歴史を物語っています。近世の久之浜は、陸前浜街道の宿場町の役割も担うとともに、製塩も行われ、岩城氏、鳥居氏、内藤氏の支配を経てその後大半が天領となり、廻米輸送の重要港となりました。その後、久之浜港は漁業基地として発展しました。

明治22年の町村制施行で、久之浜村、田之網村、金ヶ沢村、末続村が合併して久之浜村となり、大久村、小山田村、小久村が合併して大久村となり双葉郡に属しました。久之浜村は明治35年に町制施行しましたが、昭和41年、歴史的、政治経済的関係の深さから両町村は双葉郡から離れ、いわき市への大同合併となりました。

諏訪神社の大祭や波立薬師の例大祭など、祭や行事が伝承されており、古き良き様々な風物とともに地区の文化資源となっています。郷土出身の著名人としては歌手の霧島昇などがいます。

●人口と産業

平成 26 年 3 月 1 日現在の地区の現住人口は 4,858 人で、昭和 24 年の 9,900 人をピークに減少が続き、東日本大震災で減少に拍車がかかっています。65 歳以上の高齢者の割合は平成 26 年 4 月 1 日現在で 33.6%（現住人口による）と、少子高齢化が顕著に進んでいますが、福祉や語り部活動などで活動する人材資源は豊富です。なお、震災後は相双地域からの避難者の居住もあります。

この地区の産業は、震災前は久之浜港を拠点とする漁業及び水産加工業で大きく特徴づけられていました。震災で壊滅的被害を受けたこれらの産業は、再生の方向を模索している段階にあり、現状での地区の産業は農林業が主で、雇用の場の多くを地区外に頼っている状況にあります。久之浜の商店街も震災で焼失し、仮設の「浜風商店街」が営業しています（平成 26 年 3 月現在）。

観光資源として、自然や歴史資源のほか、アンモナイトセンターや海竜の里センター、福島県いわき海浜自然の家、ピコブルーベリー農園等の施設があります。

●土地利用

市街地は、久ノ浜駅の東西に、比較的コンパクトに集積しています。その西方の大久川、小久川沿いに農地が広がり、さらにその西の多くは山林です。

法制度面では、都市計画区域内の市街化区域及び市街化調整区域と都市計画区域外のエリアに三分されており、市街化調整区域の農用地の多くは、農業振興地域としての規制を受けています。ゴルフ場は現在休止中です。

●交通・都市基盤

海岸沿いに J R 常磐線、国道 6 号が貫通し、常磐線には地区の中心駅である久ノ浜駅及び、海に見える駐車場の景観を持つ末続駅があります。国道 6 号は久之浜バイパスの北半区間が開通済みで、南半区間が建設中です。また、県道白岩久ノ浜線を介して常磐自動車道いわき四倉インターチェンジの利用が容易です。

地区内には、市役所支所のほか、小学校 2 校と、中学校、保育所が各 1 校（所）あるほか、公民館 2 館、集会所 7 施設を有します。公園は都市公園を含め 2 箇所整備されています。

●被災状況と復興・防災

久之浜の市街地や久之浜港では、震災時の津波と火災により、人的犠牲も含め甚大な被害が発生しました。河川を津波が遡上し大久川の木橋も流出するなど被害は広範に及びました。久之浜小・中学校、市民運動場が主な避難場所となりました。福島第一原子力発電所から 30km 圏内にあるため、一時は全域が避難区域となりましたが、その後解除されています。

久之浜の津波被災地の復興は、土地区画整理事業を海岸沿いの市街地と内陸を一体的施工で行うこととなり、事業推進中です。海岸沿いには防災緑地及び防潮堤（TP7.2m）を整備することとなり、創出される大きな緑の空間が新しい資源ともなります。久之浜・大久支所の場所には、支所や公民館機能も含めた津波避難ビルが建設されます。

また、久之浜地区では災害公営住宅が整備されます。

金ヶ沢、末続の津波被災地では、防災集団移転促進事業を推進中です。

地区の除染活動は現在進められていますが、農林産物等の一部出荷規制や風評被害が発生しています。

(2) 地区の課題

◎震災復興関係事業の着実な推進による地区基盤の再生

新たな地域づくりの基本をなすものとして、震災からの復興に関する各種事業の確実な推進により、生活や様々な活動の基盤を再生させることが何よりも重要です。

除染の迅速な推進を大前提として、津波防御のための防潮堤、防災緑地の整備、市街地を再生させる土地区画整理事業、防災集団移転促進事業、災害公営住宅や津波避難ビルの整備等を迅速に進めることが第一の課題です。

そこでは、震災時に明らかになった問題点を教訓としてそれを最大限にクリアしつつ、災害時の被害を最小化する工夫や手法を盛り込んでいくことが求められます。

また、復興や防災対策は、それらハード事業のみで収束するものではなく、避難誘導のシステムや人の助け合いなどソフト面を連動させることが必要で、血の通う復興・防災としていかなければなりません。

◎復興から新たな歴史を刻む「人」のエネルギーの結集

復興事業の成果を活かし、その基盤の上で活動し真の「復興」を進めるのは「人」であり、その知恵と力、エネルギーを結集することが不可欠です。人口が減少しているとはいえ、地区内には地区を愛し強い意欲を持った人材が多数おり、その総力をもって新たな歴史を創っていくことです。

震災という共通の試練を経験してきた地区住民が相互に連携、役割分担しあって、行政とも協働しながら主体的にまちづくり、地域づくり活動に取り組み、それを通じて自らの生活向上につなげる姿勢を持つ必要があります。

人材の確保育成策として、農林漁業の後継者育成やまちづくり組織体制の拡充強化も大きな課題であり、また、減少する人口を補う意味でも交流人口の確保増大への取り組みも求められます。

◎資源の再認識とそれらをつなげた有効活用による魅力づくり

久之浜・大久地区には、化石や地質、景観、温泉なども含む自然や歴史文化、産物など、まちづくりの資源となり得る様々な素材がありますが、地区住民がそれらを十分に認知していない面もあり、またそれらが有機的に結びついておらず、PRも不足がちで、必ずしも有効に活用されていないともいえます。

従って、まず地区の住民が、地区の歴史や資源を知って語れる仕組みづくりが必要で、それらの価値認識を共有してその活用方法を見だし、積極的に実践していくことが求められます。点在する資源をつなげる工夫や新たな特産品づくりへの挑戦、災いを転じて福となす知恵の発揮などを通じ、新たな魅力を創造することが課題であり、またそれらの資源やその価値を積極的、効果的に情報発信していくことも重要です。

新たに生み出される防災緑地の空間や、防災集団移転促進事業の移転跡地なども有力な資源となり得るもので、それらの活用方法を多様に研究、実践していく必要があります。

◎「なりわい」の再構築による地区経済の活力創出

本地区の最大の経済基盤であった漁業・水産加工業は、その再生への努力を継続的に進める必要がありますが、それと同時に、それを補う産業＝「なりわい」を構築し、地区経済の活性化、安定を導くとともに、何よりも働く場の確保につなげることが重要な課題です。

農林産資源の付加価値を高める生産・加工活動やそのための組織体制の強化、化石等の資源にちなむ新たな特産品の開発やブランド化、産業間の連携（6次産業化）や観光への新たな取り組み、失われた商業機能の再生、再生可能エネルギーへの対応など、過去の常識にとられない斬新な発想で取り組むことも求められます。

周囲の地区とも経済的連携を確保しつつ、自らの地区内でもより多くの経済価値を生み出す努力によって、地区の自立的発展の歩を踏み出していかなければなりません。

◎誰もが安心して健康・快適に暮らせる定住環境づくり

本地区の生活や産業活動の場としての環境は、その安全性、快適性、利便性などに関して様々な問題を抱えており、震災復興と合わせてそれらをできる限り解消し、誰もが安心して健康かつ快適に暮らせる環境への改善を進める必要があります、それが、人の定住条件の向上にもつながります。

双葉郡との接点の位置を活かした相双地域の人々の定住受け入れの条件づくりも含めて、高齢者が安心して住めるスキーム・地域体制づくりのほか、若者の定住環境、子育て環境の充実への取り組みも必要となります。

特に、常磐線や国道が東西に市街地を分断している状況から、円滑な避難路確保も含めた東西の一体感を持てる市街地形成、土地利用の見直しや、福祉・医療関係のシステム充実、域内交通の確保、拠点となる賑わい空間の形成などを効果的に進めることが求められます。



末続駅付近（H24年5月）



久之浜の新しい歌コンサート（H25年3月）



海神乱舞（H24年8月）